

心づいて特集への批評をこころ

——『被告団通信』九号を讀んで——



八百屋の店先でこの店はとうしてホルモンを売つてないのだよ、と怒つてもはじまらない。住之江や尼のセンターホールへ行つて、ポートはだめだ、軍隊を走らせるよ、と言つたつて無理というものである。

食いものを売つてるのは同じだとか、水上を走るの是一つことだとか、そんなふう無理クツをつけてもはじまらない。

「この冬こうシノイだ シノクニ生きる」という特集を五号をやつたのについて、いろんな感想、批評をもらったなかに、そうしたらクツに近いようなものと受けとれる文章があつた。で、あの特集を主に構成した者として、カンタンに書いてみる。

『被告団通信』九号という印刷物に對つて

いた批評は長い文章で、その筆者が主張している内容は一応わかる。一応わかるというのは、コトバは通じるし、気持ちもうけられるということで「わかつた、その通りだ」とは、すくなくも私は思わない。

批評の要点は次のところにあるようだ。
『被告団通信』の文章を書きぬいてみる。

——貫してここ「シノクの特集」では、すつかり個人に解体され、分散され、とことん個人的に仕事をさがして生きていく苦しさを述べなく、最も初心ハ原文のままの点、斗争を通じて特例者の生活を守ると云う敵との対決の姿勢が、全く放棄されている。

この批評の筆者は、特集をよく讀んでくれた、と思う。よく讀んでくれた証拠は、ここ

とし個人的に仕事をさがして生きていく姿しか述べてはく」と書いているところだ。

そうなので。あの特集はそういうものとして構成されたのだ。なぜか？ 理由は至つて明白、シノクとは個人がどう苦難をきりぬけるか、きりぬけたか、ということだから。

その意味で「すっかり個人に解体され、分散され」という形容は当たつていない。特集はもとも個別それぞれシノギかたについて書かれ、構成されたので、集団とか組織とかをまず対象にしたのではない。だから、はじめから個人にピントを合せてあつて、何かを「解体」したり「分散」したりした結果出てきた個人ではない。「とことん個人的に仕事をさがして生きていく姿しか述べてなく」てあたり前なのだ。

私は、自分が釜ヶ崎にくらしはじめた何年か正確におぼえていないが、古い者はたいしていぞうだと思ふ、そういう自分の過去の、いわば衰れた状態がシノギだ。精一杯に強固しても個人のたにかいとということだ。

個人のきりぬけ、耐えしのび、それはどうやってみても限界はある。限界をひろげてゆくには一人より多勢ということになつて、仲間うち、クルーで、カヤ知恵やカネの出し合いがはじまる。青カンの焚火の材料を代りあつて探しに行くのもどうだし、クルーの誰かがみつけた直行仕事に交代で行くのもそうだ。親しい同士が道で出会つたとき「すまんけど今日だけシノガセテくれや」と、片手拜みのひとこと言うこともある。めしを食わせてくれ、またはカネを廻してくれという意味の挨拶だ。

運動や斗争というのは、そんな仲間うちの力や知恵やカネの出し合いにも尚限界が見えこきたとき、さらに大きな出し合いの道としてあるのではないだろうか。もっとも、世の中を広く見わたすと、どこか遠くの方で前も

暮れ、正月や梅雨どきのシノギを思い出して、シノクとは、個人めいめいバラバラのまきりぬけ、あるいは耐えしのびだと思ふ。集団的、組織的なシノギというのは、どうもそんなことはない。それはむしろ運動であろうし、批評の筆者が書いたように「斗争を通じて労働者の生活を守る」ということだろう。

運動や斗争を否定する気は全然ない。そういつたことが、半でいさなく効果多く進められることを希望しているし、自分もその一員である機会もある。だが、そういつたこととは何かと言へば、具体的に生きていく人間一人一人、つまり個人なのだから、シノギ時集が個人にピントを合せたのは、「解体」や「分散」をおこなつたのではなくて、原点に目を向けたことなのだ。くり返せば、シノギとは個人のめいめいバラバラのきりぬけ、あるいは耐えしのびのことにはすぎない。集団や組織の運動や斗争ではない。もっと受け身な、

つてきめられた運動や斗争が、いきなり天下りしてくることもある。しかし、昔の百姓一揆とか、大正時代の米騒動とか考えても、個人めいめいがシノギにシノイで、カヤ知恵やカネや食いものを出し合つて、それでもシノギがないとなつた時、爆発したのだと思ふ。

そして現在は、百姓一揆の昔や米騒動の大正時代より進んできたから、そんな半リギリまで個人個人でシノクよりは、なるべく先手を取つて運動や斗争を展開することが考えられるようになった。半でいさなく効果多くということにもそれは通じてくるかも知れない。

カントンのフモリが長くなつた。先を急ぐ五号のシノギ特集について、「敵との対決の姿勢が、全く放棄されていく」と批評されても、ミもフタもなく言へば痛くなしカエクもない。あの特集は、受け身で衰れでもある個別のシノギかた、言いかえれば一人一人が敵

の攻撃からどう身をかわしたか、どこまで身をかわし通せるかへ消極的対策をあつめて、あの特集を読んで「よし、おれは又はこのテでいこう」と個人的なヒントをくみとつてくれてもよし、「やはりみんなを戦わにゃいかん」と考えられてもよしという性質のものなのだ。それ以上でも以下でもあるとは思わなかつたし、いまも思つていない。

集団的、組織的な「対策の姿勢」についてあのシノ半特集が何も書いてないからと言って、それは「放棄」ではない。その方のことは機関紙とかビラとか演説とか、各自の手段方法で示せばよく、あの特集はそういう役割を何か、あるいは誰かに対して受け持つていない。受け持たないことをどうして「放棄」すべきだろうか。

「被告団通信」の批評の筆者が、不自由な身でいながら、特集をこまかく読んでくれたことをありがたいと思う。しかし、その身の

現在の条件からして、あの特集に、ひいてこの雑誌に、重大な思いこみを許せているのではないかという気がする。思いこみを期待と言いかえればいよいよありがたいようなものだが、掘り方専門に足場を組めと言われるのと似た困惑におそわれるのが正直なところだ。

(こ)

――釜ヶ崎生協とりあつかいパンフ――

・きけ。仲間の叫びを。訴えを。スタ共

・がよこした「犯罪者のレッテルを投げ返せ。

・パンフを読もう

「矢島一夫さんの上申書」

（300円）
（200円）
（釜ヶ崎の仲間）

《内容》はじめに / 生い立ち / 貧困から教育を奪った。在日朝鮮人と私。何故貧乏が生まれるか。少年院は少年を更生させるどころか / 他 / 監獄（監獄とはその名の通りオリになつた地獄でありこの資本主義社会はオリのない地獄である）